

# High Prevalence of Cam Deformity in Dysplastic Hips: A Three-Dimensional CT Study

河野, 裕介

<https://hdl.handle.net/2324/1806883>

---

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

氏名	河野 裕介			
論文名	High Prevalence of Cam Deformity in Dysplastic Hips: A Three-Dimensional CT Study			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	小田 義直
	副査	九州大学	教授	三浦 岳
	副査	九州大学	教授	本田 浩

### 論文審査の結果の要旨

大腿骨頸部に cam 変形が存在すると、骨盤骨切り術後に二次性的大腿骨寛骨臼衝突現象 (インピンジメント ; FAI) を引き起こす可能性がある。申請者らは、正常股、発育性股関節形成不全(DDH)による前・初期変形性股関節症(OA)股、および進行期 OA 股において、三次元的な骨頭・頸部移行部の形態比較を行った。

DDH による前・初期 OA 50 関節、進行期 OA 18 関節、正常股 24 関節の CT 画像を用いて、 $\alpha$  角、骨頭・頸部移行部オフセット比 (HNOR) を大腿骨頸部全周性に計測した。前・初期 OA 群の  $\alpha$  角は頸部の前上方、下方で正常群と比較して有意に大きく、HNOR は前上方で有意に小さかった。進行期 OA 群の  $\alpha$  角は前方で前・初期 OA 群と比較して有意に大きかった。cam 変形 (最大  $\alpha$  角  $55^{\circ}$  以上) の頻度は正常群 4.2% (1/24 関節)、前・初期 OA 群 22% (11/50 関節)、進行期 OA 群 50% (9/18 関節) であった。

以上より軟骨変性のほとんどない前・初期 OA 群の cam 変形は DDH 固有の形態と考えられ、正常群より高頻度に認められた。進行期 OA 群における高頻度の cam 変形は OA で修飾された変形と考えられた。骨盤骨切り術を行う際、進行期 OA の症例に行う場合には特に、二次性 FAI を防ぐために骨頭・頸部移行部の術前画像評価が望まれる。

以上の結果はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々の質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員会合議の結果、試験は合格と決定した。